

【授業科目】血液検査学Ⅰ Clinical hematology Ⅰ

担当教員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィスアワー	教職員への授業公開
鈴木 真紀子	1年次後期	必修	2	30	講義	あり	巻末掲載	可
授業概要 (内容と進め方)及び課題に対するフィードバック方法	<p>授業概要／血液検査学Ⅰでは、血液疾患領域を解説する。各血液疾患の病態を理解し、どのような検査を行えばその病態を把握できるのかを考えながら学修する。血液疾患と臨床検査との関わりを理解する能力を養うことにより診断・治療がどのように行われているか説明できるように理解してもらう。臨床検査の場面では、類似疾患の鑑別が重要となる場面がある。臨床で起こり得る場面を想定して授業を進めていく。特に最近では遺伝子・染色体検査の導入で、鑑別ができるようになった。遺伝子・染色体検査の結果と形態検査の結果の相関についても併せて教授する。 *実務経験を持つ教員が授業を進める。</p> <p>題に対するフィードバック方法/各講義前の小テストは次回講義に返却及び、解説する。定期試験について血液検査学Ⅱでフィードバックを行う。</p>							
授業の位置づけ	<p>本学のディプロマ・ポリシー①「臨床検査の専門性と責務を自覚するとともに、地域に住むあらゆる健康レベルの人々に専門的知識と技術に基づき臨床検査を実践できる。」の達成に寄与している。</p>							
到達目標 (履修者が到達すべき目標)	<p>①凝固線溶系の機序を理解できる。 ②出血性素因と血栓症について理解できる。 ③赤血球疾患について理解でき、関連する臨床検査を理解できる。 ④白血球疾患について理解でき、関連する臨床検査を理解できる。 ⑤白血病の分類を理解できる。遺伝子・染色体検査における分類を含む。</p>							
時間外学習に必要な学修内容および学習上の助言	<p>病気がみえる vol.5 及び、vol.6 を参考書として推薦する。血液疾患のメカニズムについて分かりやすく記載しているため、基礎を理解しながら興味深い病気のことを詳しく学ぶことができる。 第1～15 回事前学習：指定の教科書を事前に読んでおく（120分）。 第1～15 回事後学習：授業内容を復習する。要点をまとめておく（60分）。授業内容に準じた国家試験問題を解き復習することでより理解が深まる（60分）。</p> <p>※上記時間については、指定された学習課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間（2単位15回科目の場合：予習+復習4時間/1回）（1単位15回科目の場合：予習+復習1時間/1回）（1単位8回科目の場合：予習+復習4時間/1回）を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください。</p>							
授業計画	<p>第1回 血液凝固（2次止血）の機序 第2回 繊維素溶解（線溶） 第3回 出血性素因とその検査法 第4回 血栓症と抗血栓療法 第5回 赤血球の基準範囲 第6回 赤血球形態の異常 第7回 貧血の定義と分類 小球形貧血 第8回 正球形貧血 第9回 大球形貧血と赤血球増加症（多血症） 第10回 白血球の基準範囲と形態異常 第11回 白血球機能異常症 第12回 白血球増加症と減少症 第13回 白血病について FAB 分類とWHO 分類（遺伝子・染色体における分類） 第14回 様々な白血病と骨髄増殖性腫瘍 第15回 骨髄異形成症候群、M 蛋白血症</p>						全て 鈴木	
評価方法 評価基準	<p>成績は以下の評点配分によって総合的に判断する。 定期試験 70%、前回授業の復習小テスト 20%、グループワーク評価 10% 授業態度も加味する。</p>							
教科書	奈良信雄著『臨床検査学講座血液検査学』 医歯薬出版株式会社 (1年前期「血液学」で使用したものを使用)			参考書等		『病気がみえるvol.5血液、 vol.6免疫・膠原病・感染症』 メディックメディア		
学生へのメッセージ	<p>血液学の基礎を踏まえ、疾患について病態を学びます。臨床検査の実際の話も紹介しながら将来像を明確にできるよう講義します。</p>							